

PF運営報告

PF director's report

船守展正・KEK 物構研放射光

2019 年度は、PF の再出発の年でした。4 月 1 日付で、物構研の組織改編が実施され、7 月 20 日開催の「PF REBORN 2019」には、100 名を超える参加を頂きました。この新体制発足記念講演会では、現在を放射光の第二黎明期ととらえ、黎明期を特徴づける開発研究を通して世界の放射光科学を先導する新技術と若手人材を供給すること、および、先端基盤施設として引き続き多様な利用研究を推進すること、この 2 点が学術施設としての PF の使命であることを再確認しました。国内外で放射光施設の建設が進められている状況を鑑みると、新技術と人材の輩出の重要性は、益々、高まっていると言えます。

学術施設としての機能を強化するため、放射光実験施設の三部門の部門長となる教授の人事を 2018-2019 年度に実施しました。それに加えて、放射光実験施設、放射光科学研究系、加速器第六研究系の若手教員の人事も進めました。また、学術施設としての新展開や各測定手法の先端化を図るため、ビームライン再整備の具体的な検討を進めています。当日は、2020 年度の体制についてご紹介します。将来計画については、午後に独立したセッションを設けていますので、そちらで詳しく紹介する予定です。

放射光共同利用実験審査委員会(PF-PAC)は、共同利用実験の課題審査を行うのに加え、「放射光を利用する研究計画に関する重要事項を審議する」ことが任務となっています。PF-PAC では、学術施設としての機能を強化するための各種制度改正の議論を進めています。第 37 回 PF シンポジウムの開催を見合わせたために事前にご紹介できなかった改正や来年度の施行に向けて検討中の改正についてご紹介します。

最後に、2020 年度の運転について報告します。当初、2019 年度と同様の PF 3000 時間、PF-AR 2000 時間のユーザーランを目指していましたが、第 I 期に十分な運転時間が確保できなかった影響で、PF については、残念ながら 2500 時間程度に留まる見通しです。PF-AR については、第 III 期の運転を行うことで、2000 時間程度を確保できる見通しです。現在、第 II 期の運転に向け、新型コロナウイルス感染症対策として、遠隔・自動測定機能の強化など、各測定手法に適した準備を進めています。

当日は、意見交換の時間も設けています。忌憚なき意見をお聞かせ下さい。

※第 37 回 PF シンポジウムの要旨を一部修正しています。